

人間力 2.0



東京大学大学院工学研究科
精密機械工学専攻修士課程

ひらの ゆうき
平野 裕基さん

1 はじめに

古代、街とは壁の中のことであった。壁の外は森であり、闇であった。人は火と鉄を手に入れて闇を駆逐し、壁から外に出て世界を広げていった。やがて切り倒された木で造られた船により人は海という壁を越え、さらに世界を拡大した。そして人は火を効率よく使う手段を発見し、それは手工業による生産力の壁を破壊した。強大な生産力は社会の構造変化をもたらし、人種・性別・身分その他の壁を作り、またそれらを壊した。

我々は常にブレイクスルーと共に歩んできた。人の長足の進歩は革新的技術の開発と、それによる壁の破壊によるものだった。壁は内部にいる我々を守るものであると同時に、乗り越えなくてはならない障壁だったと言える。そして現在、ITの普及によるユビキタス社会の到来により、また新たな壁が壊されようとしている。それは「情報の壁」であり、これは現在までに壊されてきた物理的問題の壁とは違うレイヤーに存在する壁である。

2 「情報の壁」の崩壊がもたらす進化

個々の人間にとっては、認識できる範囲が当人にとっての世界の全てである。個人にとっての世界は情報伝達手段の発達と共に拡大されていったが、それは非双方向な情報のやりとりだった。それらの情報伝達手段は独占され、情報は限られた権力を持つ者だけが発信できるものであり、個人にとって主として情報は受け取るものであったからだ。

しかし、IT技術の発達によりその既得権益は覆されようとしている。個人が情報を自由に手軽に発信でき、それが社会に大きな影響を与える世界が形成され

つつある。これはIT関連コストの劇的な低下により誰もがPCを持ち、IT技術を利用できるようになったことと、Googleやblogの台頭によるものである。“グーグルが高性能な検索エンジンを提供したことによって、ブログは企業やマスコミの大手ホームページと、同じ力を持つようになった。なぜなら、以前は大手ホームページを最初に見ていた一般利用者が、検索エンジンをナビゲーション(道案内)に使ってあらゆるホームページを検索するようになったからである。検索エンジンで検索するという行為の中では、大手ホームページも個人のブログも、ほぼ等価値に扱われる。……(中略)……いまや世界はどんどんフラットになり、すべての情報、すべての記事、すべての日記が、大手メディアに書かれたものであるか、それとも個人によってかかれたものであるかにかかわらず、同一平面上で語られ、利用されるようになりつつある¹⁾”

そして、コミュニケーション阻害要因としての「情報の壁」が壊されることで、社会のアーキテクチャがダイナミックに変化しつつある。ネットが普及する以前の社会構造は、国に所属し、その中にある地域に所属し、その中の会社に所属し、その中のセクションに所属し…という階層的なディレクトリ構造だった。ディレクトリ間の移動にはしばしば大きなリスクとコストを伴い、情報は内部に留まりディレクトリを超えた結びつきはなかなか発生しなかった。しかし、ITの普及とそれによる「情報の壁」の崩壊に伴い、ユビキタスネット社会の到来により個人が双方向に、ウェブ状に結びつくようになってきている(Fig.1)。その一例がmixiを代表とするSNSである。現在日本で流行しているSNSは日本語ベースで日本人間の結びつきが主体だが、既にMyspace等の国際的SNSが出現しており、これらによりSNSによるコミュニケーションが国外へと広がることは想像に難くない。そし

Fig.1 Mixigraphによってmixiの人間関係を可視化した様子



てそのSNS内では年齢や人種、国籍、社会的地位、住む地域等にとらわれず新たなコミュニティが生成されていく。

影響力を増した個人が双方向に結びつきながらコミュニティを形成すれば、以前のディレトリ構造の社会よりも人々がより流動的に、ラジカルに影響を与え合うようになる。それは従来思いつきもしなかった異分野間でのコラボレーションを発生させ、新たなテクノロジーやビジネスやアートの母体となり、社会の進歩と発展を加速させるだろう。

3 「情報の壁」の崩壊がもたらす産業の歪みと解決への提案

しかし、いったん壁が崩壊すれば中にいた人間は壁により守られることはできない。個人が古いディレトリ構造を越え、「情報の壁」に囲まれた世界を脱して直接世界と向き合うようになれば、既存のアイデンティティは通用しなくなる。今までは「東大工学部大学院生の平野裕基」として社会と向き合っていたが、「平野裕基」として社会と接していかななくてはならなくなる。そして、例えば社会から収入が組織を通しての規定ではなく個人の

能力に基づいて規定されるようになれば、従来の雇用形態に比べその格差は増大する。勿論、頑張る人が報われ、頑張らない人が報われない社会の方が健全であり、格差が拡大しても仕方がないと考える国民は増えている(内閣府「国民生活選好度調査」)。

しかし、“経済協力開発機構(OECD)は20日、日本経済の現状を分析した「対日経済審査報告書」を発表した。相対的貧困層の割合は先進国で2番目とし、「不平等の度合いが増している」と指摘。格差拡大は、所得が低い世帯の子どもたちの教育水準低下などを招く恐れがあると懸念を表明した²⁾”様に、所得格差が開けば所得の低い層は学習塾等に子供を通わせることが出来ず、結果として教育水準の低下を招いてしまう。十分な教育が得られなければ格差を自力で是正する可能性は低くなり、所得の低い層の子供は所得が低いという負の連鎖が発生し、ワーキングプアを生み出す。そうした格差の固定は低所得者層のモチベーション低下を招き、ひいては優秀な労働力の不足につながり日本の競争力を大きく低下させてしまうだろう。また、これらの貧困層が巨大化すれば、彼らが高所得者層の稼ぎを食いつぶすという事になりかねない。高所得者層がそれを嫌って国外に流出すれば、貧困層はさらに貧窮して負の連鎖を招くこととなる。

これを解決するために、私は「ユビキタスネット社会への高度適応教育」を提案する。具体的な政策として、まず子供を持つ全家庭にGoogle PCの様にPCを無償配布する。そして、無線LANでも有線でもかまわないので、それらのPCが全てネットにアクセスできる環境を構築する。その上で、義務教育の初期の段階からネットリテラシー及びネットを活用するスキルを身につけさせる教育を行うのである。重要な点は、子供の時からネットに親しみ、ネットを活用するという発想を身につけさせることだ。そしてそれは経済的理由による教育の格差を是正する。なぜならば、ネット上には既に整備された膨大なコンテンツがあたかも学習の高速道路の様に存在するからである。“これでもかこれでもか”と膨大な情報

が日々ネット上に追加され、グーグルをはじめとする恐ろしいほどに洗練された新しい道具が、片っ端からその情報を整理していく。一端誰かによって言語化されてしまった内容は、ネットを介して皆と共有される。よって後から来る世代がある分野を極めたいという意志さえ持てば、あたかも高速道路を疾走するかのように過去の英知を吸収することができるようになった。これが「高速道路の整備」の意味である³⁾”

このように、ネットを活用するノウハウさえあれば実質タダで学習することが可能であり、後は本人のモチベーション次第である。そして、格差の固定がもたらしたモチベーションの低下もネットを通じて解消される。ここで言うモチベーションの低下は「格差が大きすぎて上に行けない、追いつけない」という諦めから発生するが、彼らにはネットを通じて自分と似た境遇から上流へ上り詰めた事例が大量に提示されるからである。ネット上に形成されたつながりを辿れば、その事例の対象者に直接アクセスすることさえ可能となり、それらは大いにモチベーションを刺激するに違いない。ネットによりモチベーションを刺激され、学習をすればそこから成功する者も出てくるだろう。その成功は新たな産業と雇用を生み、正の連鎖が始まるきっかけにすらなるかも知れない。付け加えるならば、大学等の高等教育機関の奨学金制度をもっと充実させれば、さらに経済的問題による格差の固定を改善することが可能となるだろう。

4 「情報の壁」の崩壊がもたらす社会の歪みと解決への提案

“勝ち組：現代において、社会的地位・信用や経済的な面で成功している企業や個人のこと。また、その対義語として、低賃金であったり社会的な地位・信用が低い場合、エリートコースから外れた場合などを指して負け組という⁴⁾”

最近この勝ち組・負け組という概念が大きく取り上げ

られている。なぜ急速にこの社会的格差を象徴する言葉が広まったのだろうか。その理由として、私はITにより「情報の壁」が壊れ、個人が直接社会と接するようになったからだと推測する。直接個人の価値を計るモノサシとして長らく存在してきた経済的・社会的地位といったモノサシは誰にでもわかりやすく、受け入れやすかったのである。そして、この概念の隆盛は一時的なもので、近いうちに廃れていくだろう。なぜならば、この概念は「情報の壁」が壊れる以前の価値観に基づいているからだ。「情報の壁」が崩れた後に台頭する価値観は、「他人は他人、自分は自分」という価値観である。

個人がありのままの姿でまっさらな同じ土俵に立たされるとき、最初に発生するのは勝ち組・負け組の様な一方向から見た評価で相手と自分との差異を見だし、それをよりどころとする価値観である。だが、双方向に情報のやりとりを続ければ、必ずしも評価は一方向から決められるものではないことに気づくだろう。そこに気づけば互いの違いを非難するのではなく肯定し、そのお互いの肯定を基礎として「強い個性」を持ち自立した個人が形成されていくはずである。それが「他人は他人、自分は自分」の示す価値観だ。

つまり、現在の社会的な価値観の歪みは過渡期に発生したものであり、ネットでの結びつきが深くなれば自然と消滅する。悠々と我々はその変化を観察していればいいのである

5 おわりに

日本にはこの価値観の変化の遙か以前から、ポリウムゾーンに流されることなく自立した強い個人達が存在してきた。いわゆる「オタク」達である。彼らは自分自身の価値観をよりどころに個性を磨き、人間力を高めてきた。そして彼らが創り上げた文化は世界の最先端を走り、日々輸出されている。たった1ジャンルの、少数の人間が人間力を持ち、それを行使することで世界に影響

を与えうる文化が形成されたのである。

現在進行しつつある事態はその比ではない。個人の影響力が増大し、人間力を持った個人として自立しつつある。そして個人が持つ「人間力」が、ウェブを通じて結びつく言わば「人間力2.0」という事態が進行中なのである。社会は、そして世界はきっと私の思いつかないような変化を、圧倒的速度で成し遂げるだろう。その時に一人の個人として、そして結びつきの中の個人として、どんな人間力を発揮できるかが楽しみで仕方がない。

参考文献

- 1) 『グーグルGoogle 既存のビジネスを破壊する』佐々木俊尚著、文春親書
- 2) 共同通信 2006年7月20日11時26分発表
- 3) 『ウェブ進化論』梅田望夫、ちくま新書
- 4) Wikipedia 勝ち組の項より引用